



この講演会を終えて
教育再生委員会
藤井俊孝委員長

3月公開例会に、平日の遅い時間帯にも関わらず、沢山の方に参加していただき、誠にありがとうございます。
現代は、社会環境の変化により、昔に比べて子育てや家庭教育が難しくなってきました。そこで、高橋史朗氏にご講演いただくことにより、子育てをする上で、親の意識改革が最重要課題であることをご理解いただけたいと思います。
本年度「教育の原点は家庭」という考えのもと、より良い教育環境を目指して活動しております。そのために今回は心と頭で学ぶことができたと思います。今後は親子や地域の方とのふれあいや様々な体験を通じて、子どもとのコミュニケーションを深め、思いやりの心をもつ家庭が増えるように努めてまいります。
これからも皆様からのご指導ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

ものは、まずは子どもを丸ごと受け止めなければならぬのです。それは、やさしさに裏打ちされた厳しさだけが子どもを変えることができるからです。

家庭は子どもの「母港」

私はよく家を「母港」に例えるのですが、その「母港」が今の日本にはなくなりつつあります。最近の子どもが描いた絵は、1980年代と比べ大きな変化が見られ、「家」を小さく描かれる事が多くなりました。実際に「家」は小さくはなっていませんが、心理的な居場所としての「家」が小さくなっているのではないのでしょうか。
子どもは外で辛いことがあっても、家に帰ったら親がしっかり抱きしめてあげて、元気になり、また頑張れる。そんな家が少なくなってきたように感じます。
子育ては「母港」から少しづつ遠洋航海できるようにしてゆく営みです。しかし、今の子どもたちには帰るべき「母港」がない。だから、マザー・テレサはあのような事を言ったのではないのでしょうか。



ます。そうでないと母子分離不安を起こし、母親子どもから離れられないのです。
そして、最後に「歩かせる」このとき、子どもは一人の人間として自立するのです。



丸ごと受け止める本当の強さ

私は昔「悩める親の会」というものを立ち上げた事があります。その場では弱音と愚痴をひたすら語ってもらいました。それについて、私はあえて一切何も言いませんでした。それは、丸ごと気持ちを受け止めないと、皆さんが私を受け入れてくれないからです。説得しようとする和逃げてゆくのです。丸ごと受け止めることが大切なのです。

2時間ほど皆さんの弱音と愚痴を聞いた後、すべてを話した親たちは「今日はいいことを伺いました」「勉強になりました」とすっきりした表情で帰ってゆきました。私は何も言っていないし、何も教えていません。それなのにです。

子どもについても、本当に厳しい父親という

コラム2

下におろす時の父性の重要性

私は父性の働きを「出港」だと言っています。中学生の6割に反抗期がなくなっているそうです。理由は子育てに熱くかかわる親父がいなくなったからです。ある地域で「親に何が言いたいか」という標語を募集したところ、優秀賞に選ばれたのは

「父よ、何か言ってくれ。母よ、何も言わないでくれ。」

であったそうです。母はガミガミとうるさいが、父は存在感がなくならぬ方がいい。こういった家庭像を表しているのだと思います。

たとえば「人を殺すとどういう気持ちになるか体験してみたかった」という動機で人を殺す子どもがいました。また学校の作文で「人の命はかけがえのない大切なものです」と書いていたのに、同級生を殺し、悲しんでいる被害者の両親を見て何も感じない子どもがいました。
なぜ、思いやりの心が育たなかったのでしょうか。原因の一つとして小さい頃一人で遊んでいたからだと言われてます。親にとっては一人で遊ぶ子どもは手がかからなくていいかもしれないかもしれませんが、対人関係能力の基盤は愛着形成であると、文部科学省の脳科学研究会が結論を出しています。その「愛着形成」においては、ひとりですることが大きな障害になるのです。



愛着形成はまず親子のコミュニケーションから!

「授乳中に携帯電話をしている母親が急増している」といわれています。授乳中は、母親の自由時間とらえているから、そのような行動をするのでしょうか。赤ちゃんにとって、授乳とは母親からの安心と信頼を感じている時間ではないでしょうか。
その結果として、親がほほ笑んでほほ笑み返しをしない赤ちゃん「サイレントベイビー」の予備軍が13年前には30%ほどいと言われていたましたが、現在はもっと増えています。
また、テレビを見ているときには、親子の会

コラム1

世界で響盛をかっている日本の親

渡辺京二著「逝きし世の面影」(平凡社ライブラリー)の第10章「子どもの樂園」は、江戸時代の子どもの様子を外国人がつぶさに描いたものです。そこには「江戸時代の子どもたちは世界一幸せに暮らしていた」と書かれています。また、同

話が一切ないということがあります。これは、親子間のコミュニケーションが成り立っていないことを意味しています。

三つ子の魂、百まで...

学力も体力も徳育も、土台は家庭の幼時期にあるのです。そのことをもっと親は認識する必要があります。

日本学会会議によれば、思いやり(共感性)・恥・罪悪感とは2歳の終わりの頃に子どもに育まれると言われています。善悪の感覚は3歳のはじめだと言われています。これを臨界期といいます。

UCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス分校)では「キレル」というメカニズムを解析しました。それによりますと、自己抑制の臨界期は3歳だと判明しました。

人間の脳は3歳で6割以上完成します。8歳で9割以上完成します。これは脳の発達の科学的真実です。

また、ユニセフは世界子供白書の中で「3歳までに親が子供にどうかかわったかが、将来消すことのできない刻印となる」と書いています。

肌で感じあう、親子の心の一体感

また、スキンシップが子どもの心を豊かにします。親の愛情が子どもの心を発達させる面もありますが、子どもと密接にかかわることによって、親が親として育てているという互恵関係なのではないかと思えます。
思いやりの心とは、相手の身になって感じる事なのです。相手の立場に立つためには、まず親との一体感を体験している必要があります。親との一体感を体験し、愛着を育み、思いやりの心が生まれてくるのです。

著にはエドワード・S・モースによる紹介として「日本人は桜見物の群衆にも秩序がある。どこにもゴミや落書きがない」と書かれています。江戸時代はそんな美しい国「日本」だったのです。そして「世界中で両親を敬愛し、お年寄りを尊敬すること、日本の子どもにおよぶものはない」とも書かれています。
江戸時代、日本の子どもは世界で最も礼儀正しいかったのに、現在は世界でもっとも礼儀が悪いと言われています。そして、世界一幸せに暮らしていた日

その他にも「睡眠障害・食生活の乱れ・自然体験の少なさ」が子どもの発育に大きな影響を与えています。

3段階に分かれる子どもの自立

昔から日本では「しっかり抱いて、下におろして、歩かせる」と言われてきました。子どもの発達には3段階に分かれています。それを昔の日本人は感覚的に言い表していたのです。

まずは「しっかり抱く」親に甘えて依存する段階です。これが愛着になります。愛着とは無条件に受け止めることです。丸ごと受け止められた時に、自己肯定感や自尊感情が生まれるのです。

日本の子どもが「自分が役に立たない人間である」と考えている理由は、まず親から丸ごと受け止められていないからです。自己肯定感や自尊感情が低いのは家庭で「しっかり抱きしめる」ことが欠落しているのが原因なのです。

次に「下におろす」親に反抗する段階です。反抗するということは、教育上望ましいことです。親は突然子どもが反抗すると、とんでもないことになったと焦るのですが、子どもが反抗することは、自立するために必要な段階であり、健全な発達をしているということなのです。

その時に必要なことは「下におろす」ということなのです。たとえば、チンパンジーは6か月間しっかり子どもを抱えています。しかしそのあとは下に必ずおろします。そこから先は、いくら甘えてきても絶対に抱きしめません。日本の母親は、いつまでも「しっかり抱いて」いる段階を続けようとしします。チンパンジーのほうがしっかりと「下におろす」ことをやっている

本の子どもたちが、今、世界一孤独感を感じながら暮らしています。150年とすこして、なぜ子どもたちは天国から地獄に落ちてしまったのでしょうか。
それは、子どもの責任ではありません。そしてもっと響盛をかっているのは、そんな子どもたちにきちんとしつけをしない、日本の親たちです。そのことを、私たちは今一度よく考えてみる必要があります。

本紙「やっさもつ」は、ここに掲載の企業のご協力と(社)三原青年会議所の自主財源で発行しています。

Table with multiple columns of company names and addresses, organized by region (e.g., 北海道, 青森県, etc.).

